

Graded Direct Method Association Of Japan

News Bulletin

第36号

英語教授法通信

1984年6月9日

編集・発行・GDM英語教授法研究会 事務局 〒112 東京都文京区目白台2-10-10 佐藤由美子方 TEL.(03) 947-1276

この頃見たこと思ったこと

東山 ^{ヒサ} 永

つい先日ヨーコさんから頂いたお便りに、吉沢先生にはじめてお目にかかってから30年近くたってしまったなんてとても信じられません……とありました。1952年秋第1回のセミナー、今年は1984年。授業中でしたら“*You are very good at number work*”とほめて答えてもらおうところです。その30年間に、ユズルさんほかのお世話で、会の形が整い、Bulletin や公開講演会が始められました。内容の充実と若い人達が質的に育つことをひたすら願って活動なさった吉沢先生は悲壮感はありませんでした、と云ってましたが、今迄にいろいろのことがあったのは当然ですが、最近吉沢先生、升川さんの名前だけしか知らない会員が少なからずいるということは、おどろきです。お二人とお別れしたのは、つい1、2年前のことですのに。

1973年の Advanced Seminar であった事を書きましょう。吉沢先生の“*Narration*”でした。全員息をのんで、はらはら、どきどき。汗（油汗）びっしょりの手形を黒板に残したのは、箕田さん。その demonstration の見事なこと、“はーっ”と云ったきり、みんな言葉ありませんでした。その時、升川さん“すばらしかった!!” 先生少々上気して“ほめられるっていい気持ちね。とても happy。今迄の良いことは云わないというのを改めて、これからはよいところはほめましょう。”となったのです。

そのほめ方にも grading があるのですが。月例会やセミナーで、ちょっとほめられると自分を過大評価してしまう人もいます。数年どころか、それ以上も姿を見せず、セミナーにも参加しない人は、本当のGDMから外れ

目次 ● この頃見たこと思ったこと	東山 永	1
学校の成績のつけ方	山田 初裕	2
テストのいろいろ	吉沢 美穂	3
減点法によらない評価も可能である	片桐ユズル	4
授業の中での評価について	吉沢 郁生	5
評価の視点からみたGDM	萬谷 隆一	7
活動報告		15

て、自分流の授業をしているかもしれません。最近、そのような例を、東でも西でも見ました。GDM年齢の若い方でも、それが本物でない、わかる程なのです。困ったものです。しかし若い人達もそれだけの目をもつ程に育っているのです。うれしいことです。みんなの前で demonstration をして comment を受け、絶えず自分を磨くことを忘れてはいけなと思います。ある意味では生徒の評価云々より、教師自身の方が問題です。みんなから、数や文字で表せない評価をしてもらうことでしょう。或る夏のセミナーで staff をつとめた Y さん、その翌年は、また受講者として来ました。そういうところに、高校教師の他いろいろ活動し、また成人クラスを受けもつ実践家としての現在の Y さんがいるのです。

今回、GDMにおける評価についての調査の協力依頼を受けましたが、私は幸か不幸か生徒の評価をする必要がありませんでした。しかし毎回、A さんの動詞がきちんと入るようになったとか、B さんの hearing がよくなったとか、頭が柔らかくなったとかは見えています。成人クラスで 85 レッスン（11ヶ月、90分授業）を終えた時、それぞれ、かなりの進歩があるものです。

はじめは、か細い声で、やっと “I am here.” と云っていた 60 才を過ぎた生徒さんの話は、涙の出る程うれしいものでした。その方は、アメリカにいる息子さんのホテルの電話と部屋番号を手にも、電話をかけました。フロント係と ETP の英語で話をしたそうです。太平洋を距てていることで相手のことは早くて波打ってよくわからなかったけれど、どうも留守のようだったので “Thank you.” と云って、電話を切ったそうです。そして後程、息子さんから、用件が正しく伝えられた旨連絡があったのでとてもうれしかったと云っていました。

こんどは若い例。空港で給油係をしていた青年。外国から飛行機が着く度にどきどき、相手が口を開く前に、日本語で話しかけてい

学校の成績のつけ方

山田 初裕

ある学校でのことである。父親が息子の成績について疑問があると、担任に訴えてきた。息子は体力もあり、運動神経もすぐれていて中学の時から、体育は得意教科の一つであった。それが高校では評価が「I」であるのはどうしても納得できない。体育では一体どんな評価の仕方が行なわれているのか知りたいというのである。担任がすぐ体育科の担当教員に聞いたところではその子は実技では合格点をとっているのだが、平常の授業態度での減点が多く、総合的な評価では「I」になるという。平常点の対象となるのは、欠席（減点1）、見学（減点0.5）、遅刻（減点0.5）着換えがおそくて、体育の授業におくれた場合。異装（減点0.5 学校での規定の体育着を着用していない時。なお、平常の授業ではセッケンをつけることになっているがどれか一つでも違反していれば減点の対象となる。）

私はこの話から 2 つのことを取りあげて、考えてみたいと思う。

1 つは、「減点主義」の考えである。この思想の根本は、欠点のないのが一番ということだろう。たえず失敗しないよう、誤りを犯さないようと周囲に気をつかい、積極的に何かをするという気持ちを生徒から奪ってしまう。人は欠点を云々されるより、良い点をほめられた時に「やる気」をだすものだ。日常の学習評価は、生徒ひとりひとりを認め励ますためにあるのだという観点に立つべきであ

ゝたそうです。それが、一年後、職場で特に意識しないで、英語で話している自分に気がついたというのです。それぞれ、高く評価したいものです。

ろう。だから、良い点があれば、それを積極的に評価する「加点主義」といった考えがあってもよいのではないか。テストの時もよくできるなら、100点をこえることがあっても良いと思う。私はテストの時よく絵を提示してそれについて英文をかかせる問題を出す、時々すばらしい内容の文にぶつかって100点をこえる点をつけることがある。また○や×の他に◇を使う。これは正解とはいえないが、全くの誤りとするにはしのびない場合である。たとえば、語順や tense は完全なのに単語のつづりが間違っているような場合、つまり、その文で言おうとしていることが理解できるなら、少なくとも半分は正解として扱うのである。このやり方だと生徒は何かしら書けば評価されるということで、いろいろと文を書くようになる。書けば間違いを直すことができるが、書かなくては手の打ちようがない。speaking でも同じことが言える。言い間違いは訂正できるが、沈黙ではどうしようもない。完全主義を打破するには、まず減点方式を改めなければならない。

その2は、評価項目を細分化し、数量化して評価すれば、それは客観的であり、正確であると考える考えである。前述の体育の評価の仕方は客観的な記録をもとにしていて、機械的に点数で行われ、他からの反論のできにくい仕組みになっている。(教科には教科独自の評価方法があるという言い方もその一つである。)しかし平常の学習態度や提出物などは客観的に数値化しにくいし、教師の主観に流されやすい。もし遅刻や異装を評価するなら、授業に対する興味・関心も評価しないと片手落ちだろう。

評価はその教師の教育観、大きくいえば世界観と関係しているところが多く、簡単にどの評価が正しく、誰の評価が正しくないと言えない。どれがより良い評価という言い方しかならないと思う。教師は毎日毎時間生徒一人一人を評価しながら授業を行っているのだ。(Aはこのところがまだよくできていない。)

(Bの発想はすばらしい。)(Cは……)

たゞこれら informal な評価が一度数値に換算されると formal なものとなって客観性と権威をもち、大きな重みをもって、生徒は勿論、生みの親である教師にも、手に負えないものになってしまう。そこでなるべく数値化せず、文章で表現するか、又は現に多くの小学校で行なわれているような、3段階程度の評価が妥当なのではないか、というのが私の考えだ。しかし学校は5段階評価になっているので、なるべく5と1はつけないようにしているのが現状である。

テストのいろいろ

吉沢美穂

小人数のクラスでは、あまりテストを行う必要がないこともあるが、現在の中学のように大人数のクラスでは、生徒の力を試すだけでなく、授業の効果を確めるためにもテストに頼らなければならないことが多い。

第一に、テストは学期試験というような大きなものを回数を少く行うよりも、むしろ exercise の形で小テストを回数多く実施することが望ましい。これは、生徒の成績評価を公平にするためでなく、試験に対する恐怖心を除き、いわゆる一夜づけの試験勉強をふせぎ平素の勉強に重点をおく習慣を養うのに役に立つ。

第二に、これらの小テストは、進度に従って授業の効果を確めて、教師の反省の材料にするために、なるべく目的のはっきりしたものを作成しなくてはならない。すなわち、テストの目的以外の原因で成績が左右されることなく、テストしようとする目的の項目の結果が、直接現れるような方式に作成しなくてはならない。(以下略)

(1957年英語教授法通信――

『GDMを生きて』)

減点法によらない

評価も可能である

片桐ユズル

日常の授業を生徒からの feedback にたよりながらすすめているとはいえ、やはり教師は教える、ということに熱中しているので、たまには立ち止り、生徒も教師もともに到達度をふりかえてみるために、なんらかの種類の「評価」をしてみると、また新しい発見がある。

しかし評価は、平常の授業に悪影響を及ぼさないべきであり、特にGDMのばあい生徒の自発的な発言を encourage しているのだから、それを損わないテストなんて存在し得るのだろうかという疑問をもつ人も多だろう。

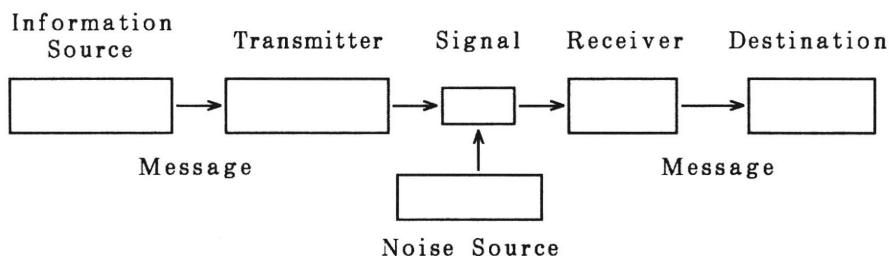
ふつうのテストは減点法によって行なわれる。教師が頭の中で描く理想の答えを満点として、それから遠ざかるごとに点が減る。まちがいをすると点が減るから、なるべく長い文章を生徒は使わなくなる。ものいえばくちびる寒し秋の風！このモデルは Shannon & Weaver のコミュニケーション理論だ。発音や文法が悪いことは noise になる。noise が多くなると、つたわりにくくなる。

しかしわれわれは noise の反対に、signal を reinforce するようなものを考えられないだろうか？ たとえば絵や写真のような visual aids とか実物、あるいは声の調子とか身ぶり表情など、つたえたいことをつたえるの

に、われわれが意識的無意識につかっている手段の総合として、会話はなりたつ。

というわけで京都精華大学美術学部1年のわたしのクラスでは、区切りのよいところまでテキストがすすむと、3分間スピーチということをして学生に自由に英語でしゃべってもらう。自分自身について、いわゆる英作文の課題みたいに“My hobby is…”などと暗記してきてしゃべるひともいれば、好きなスターの写真をみせて“This is ダレダレ”とはじめるひともいれば、なにかの物を put したり take したり give したりするひともいる。その3分間をどれだけ豊かな経験としてすごせたかで、(Excellent,) Very Good、Good、Fair、(Poor) ぐらいに分ける。たとえ fluent であっても、実感がともなわなければ良くないし、つかえながらでもクラス一同をウーンとうならせるひともいる。もってきて見せた物のアイデアはよくても、それをいうことばがまったく出てこないひともいるかとおもえば、まわりのごくあたりまえの状況を淡々と describe しただけで、やるなあ、とおもわせるひともいる。

第一回目のスピーチでは3分間がすごく長く、もう言えませんが、とおりてしまうひともいる。しかし半年たってからのスピーチでは3分間はみじかく、言いたいことがおさまきらないひともいる。つまり同一時間をどれだけ退屈にすごさせるか、短かく感じさせるかで評価をきめることができる。いままで客観的にテストできないとおもわれていた主観的な心理状態をカール・ロジャーズなどの Humanistic Psychology は数量化して示した



授業の中での評価について

吉 沢 郁 生

現在の学校現場では、テストは授業を改善して生徒の意欲を引き出すというより、生徒をランクづけするための資料を得るために行なわれていると言ってよい。そしてそのテストの結果をもとに、五段階のどの辺に位置するかを数字で表わしたものが通知票に記される。その数字の合計が大きい程「よくできる生徒」とみなされ、「できる生徒」どうし、あるいは「あまりできない生徒」どうしが同じ学校に進学するように期待されるわけである。そのような現実を切ないと感じるか、それともそうした選別こそが生徒を鍛えていくのだと考えるかが、評価というものをどうとらえるかの分かれ目となるだろう。

評価という作業は本来授業をよりよいものへ変えていくための手がかりである。テストはそのためにこそ使われなくてはならないのである。と同時に、教師が自分の授業を実践に即して連続的に点検するには、授業の中での評価ということが必要になってくる。

GDMを通じて私は、授業の中で生徒を評価し、その場で指導方法を臨機応変に変えていくことの大切さを学んだ。高校1年のクラスでの私の経験をもとに、具体的にどのような手だてがあるか述べてみたい。

【どのようなやり方で評価するか】

1. 教師の示した場面または絵について、生徒を指名して一人ずつ言わせてみる。——教えたことがら、特にその時間に新しく教えた target sentences がきちんと定着した

かどうかを見るわけである。必要に応じて生徒の英語を修正して言い直させたりする。40人ものクラスでは全員について一人一人確認をとることができないので、コーラスで言わせる中である程度判断したり、授業の中のほかの部分で確認しなければならない。

2. 教師の示した場面あるいは絵について言えることを、指名しないで自由に言わせてみる。——生徒が自分で自在に場面を切り取ることができるかどうか、その授業以前に習ったことが忘れずに残っているかどうか、どれだけ自発的に発言できるか、を見るわけである。Reviewをする時にこのやり方を取ることが多く、生徒の負担にならない範囲内で、英語が日本語の干渉を受けていないかどうか、イントネーションなどが場面と正しく対応しているかどうかについても、チェックし指導していく。これは評価のやり方の一つであると同時に、生徒の自発性を育てていくための、GDMに特徴的な指導方法の一つであると言える。
3. Flash cards や E T P の文章を指名して読ませてみる。——これは文章が読めているかどうか、発音やリズムが正しいかどうかを見るわけである。高校生の場合、中学校で一度は習ってきた単語が殆どであるため、リズムやイントネーションなどの方に注意を向けさせることが多い。
4. 黒板に貼った（あるいは、描いた）絵について、生徒に黒板へ文を書かせてみる。——教師の指定する文型で書かせる場合、自由に書かせる場合、ブランクを埋めさせる場合などいろいろである。この時、生徒が黒板に残していった英語のミスは大変貴重である。そのミスを訂正する発言がほかの生徒から出されれば、その生徒にははっきり定着していることがわかるし、生徒の頻繁におかすミスについては、全員の前で訂正することで、その部分に意識を向けさせることができる。これは writing を通じ

（4 頁より）

が、語学力の評価でもそういう方向があるとおもう。

ての評価の一つのやり方だが、そのためにはミスをしたことを責めるような雰囲気を作らないことが大切である。この作業は、他の生徒にも見てわかる文字を書くという態度を養うことを指導することにもなる。

5. 教師の示した絵についてノートやプリントに文を書かせてみる。(ノートの場合は絵も写させる。)——この writing の作業をさせながら、教師は生徒のノートを見てまわり、作業をしているかどうか、正しく書けているかどうかを、その場で知るように心がけるわけである。ミスがあればそのつど個人的に指摘したり、作業の速い生徒については書いた文を読ませたり、作業の遅い生徒にはヒントを与えたりして、生徒を個別に評価し指導できる機会となる。また、クラス全体の作業の進み具合を見て、writing の作業量が適切だったかどうかを判断するわけである。この時のノートやプリントは必要があれば回収して点検し、生徒に返却する。この作業を通じて文字の面から生徒一人一人の表情に触れることができるのだが、生徒数が多いとこれは教師にとって大きな負担となる。

【何について評価するか】

以上1～5に述べたことは、授業の内容である英語そのものが授業の中でどれくらい定着したかについて見るものである。しかしそれと併行して、教師は英語の授業を真にコトバの授業として成立させるために、英語そのものの以外の部分についても、評価し吟味しなければならないと思う。つまり、

1. 英語そのものがしっかり定着したかどうかについて知ること。
それに加えて、
2. 生徒がお互いに他者の発言を聞くということができているかどうか、について。——教師に指名されて発言してしまえば、もう自分の番は終わった、ほかの人が何を言おうとそれが聞こえようが聞こえまいが関係

ない、という態度が現代の生徒に深くしみこんでいるように思う。しかし、一人の発言をクラスの全員が集中して聞くということがなければ、生徒どうしのコミュニケーションは成立しないだろう。

3. 生徒が発言した時、その声は教師だけでなく他の生徒たちにもきちんと届いているだろうか、とういことについて。——教師だけが聞き取れるだけでは、その生徒の発言をクラス全体で共有することにならない。他の生徒たちにも聞こえるのに充分なだけの声を出させること、それはコトバの授業をする上でなおざりにされてはならない。
4. 教師と生徒との間に、アイ・コンタクトがきちんと成立しているかどうか、について。——これは英語が日本語と異なる点の一つであって、このことを避けていては英語の本質的な部分に触れることができないように思う。

授業の中での評価は、その時の授業をどう展開していくかということと不可分に結びついている。また教師の英語力にも左右されてくる。そのため、「授業の中での評価行為」をそれだけ独立したものとして取り出して、いわゆる“科学的”な考察を加えることは難しい。教師は何を教えたいと願ったか、どのような plan をもって授業に臨んだか、その授業の中で生徒はどのように動き反応したか、教師はそれをどのようにとらえ切りかえしていったか……ということ、授業の事実について一つ一つ考察する中でしか、「授業の中での評価」という問題は論じられないだろう。そしてそのようにして論じられた具体的なもの、実践的なもののしか、教師にとっての栄養にはならないであろう。

評価の視点からみた G D M

萬 谷 隆 一

はじめに

評価といえはすぐに「ペーパーテスト」や「試験」ということばを連想するが、GDMにおける評価の考えかたはそうした既製の考えかたとは違っている。本稿においてはGDMの教授法に適した評価の考えかたと方法を明らかにしたい。またGDMの教師がかかえる評価に関する問題点もあわせて考えてゆきたい。

本稿は二つに分かれている。前半では、GDMの教室でどのような評価を行なっているか、アンケート調査の結果にもとづいて、その実状を明らかにする。後半では、GDMにおける評価の基本的な考えかたとテスト方法について述べる。

1-a. アンケート調査の結果

本年2～3月に、GDMで教えている教師を対象に評価・テストについての調査をおこなった。目的は、実態を把握することと問題点を明らかにすることであった。調査範囲は東・西日本のGDM会員（ただし東日本は、GDMで教えている会員を選んだ）とし、発送250通のうち37通（東17、西20）を回収した。合計53教室についてデータが得られた。GDMでの経験年数は、平均8.9年で、小学校またはそれ以下のレベルでの経験が長い教師が最も多く（71%）、ついで中・高レベル（18%）、成人レベル（11%）となった。以下その結果を報告する。

1) 「あなたの学校・教室では、テストをしていますか。」（53教室中）

全くしない・・・・・・・・・30
定期テスト・・・・・・・・・9
不定期テスト・・・・・・・・・3

授業中の小テスト・・・・・・・・・17

2) 「GDMで教えた結果は、テストしていますか」

している・・・・・・・・・11
していない・・・・・・・・・21
部分的にしている・・・・・・・・・21

3) 1) で定期テストをすると答えた9教室に対して「定期テストは義務づけられていますか」

はい・・・・・・・・・8
いいえ・・・・・・・・・1

「GDMの効果を確かめるために、定期テストではおもにどの技能をテストしていますか」

Speaking・・・・・・・・・5
Listening・・・・・・・・・4
Writing・・・・・・・・・8
Reading・・・・・・・・・7

4) a. 「成績はつけていますか」

はい・・・・・・・・・20
いいえ・・・・・・・・・33

以下、a. で「はい」と答えた20教室に対して

b. 「それは義務ですか」

はい・・・・・・・・・16
いいえ・・・・・・・・・4

c. 「成績をつけるとき、どのような方法をとりますか」

授業中の観察・・・・・・・・・18
定期テスト・・・・・・・・・9
不定期テスト・・・・・・・・・3
出席・・・・・・・・・7
授業中の小テスト・・・・・・・・・11
宿題・・・・・・・・・5

d. 「成績は通知しますか」

しない・・・・・・・・・3

する	17
生徒に	13
親に	10
学校に	8
e. 「成績のつけかた」	
点数法	5
段階評定	12
記述式	9
f. 「自己評価は、させていますか」	
はい	7

1-b. アンケート調査結果の分析と解釈

1) GDMの教室では、組織立ててテストしているところは明らかに少ない(30教室、57%)。特に定期テストを行っている教室は9教室しかなく、このうち7つが公立学校または私立小学校であり、残り2つは塾と英会話学校であった。

2) GDMで教えた結果を「テストしている」(11)または「部分的にテストしている」(21)という教室は、全部で32教室で、「していない」教室は、21であった。部分的にテストしているという教室が多かったのは、授業中の小テストや練習問題で学習の進みぐあいを確かめる教師が多いためである。

3) 定期テストをしていると1)で答えた9教室のうち8教室が、定期テストが義務づけられていると答えている。すなわち定期テストが義務づけられていないGDMの教室では、ほとんど定期テストを実施していないことになる。また定期テストで主にどの技能をテストしているかについては、9教室のうちSpeaking 5, Listening 4, Writing 8, Reading 7となった。極めてサンプル数が少ないのではっきりしたことは言えないが、ReadingとWritingのペーパーテストが中心であり、受容と発出技能とを比べるとやや後者のほうが重視されているようである。

4) 成績については、つけている教室は20であり、そのうち7割(14教室)が公立学校と私立小学校であった。つけていない教室は

33と多く、すべて塾や英会話学校であった。学校の制度のために成績をつけている教室が多く、成績をつけることが義務づけられてると答えた教室は、20教室中8割(16)であった。

成績をつける方法については、「授業中の観察」を重視するという答えが9割(18教室)で最も多く、また「授業中の小テスト」という答えも5割(11教室)あった。GDMの教師が、いかに授業を大切にしているかが分かる。広島YMCAの近藤妙子氏は、「クラスの中での生徒の姿勢や、発言の態度こそ注意深く観察すべき評価の対象」と述べている(注1)。また定期テストと共に「出席」を重視する教室が多いことも注目すべきである。

成績の通知については、「する」という答えが20教室中約8割(17教室)で、そのうち「生徒に通知する」としたものが13教室あった。また成績のつけかたについては、1～5、A～Dといった段階評定が最も多く(12教室、6割)、ついで記述式が多かった(9教室、4.5割)。成績がどうだったかを点数や段階評定のみで通知するGDMの教室は、ほとんどないようである。多くの場合、クラスリポートや連絡表などと呼ばれるものが使われている。教師は、この中に成績と共にクラスの様子や個人の頑張りぐあい、もうすこし努力してほしいところなどを記述的に書き、生徒または親に連絡する。例としては広島YMCAの「クラスリポート」、千葉YMCAの「クラス授業報告書」、金沢KYECの「学習状況連絡表」などがある。

自己評価については、7教室のみが実施しており少数である。自己評価は、生徒に自分の学習の状況を把握させることができるだけでなく、授業中やテストであまり出ていない生徒の問題点などを発見でき、「生徒の見方がかわる」こともある(注2)。自己評価の意義を考え直してみることも必要ではなかろうか。

このアンケート調査の結果で最もはっきりしていることは、GDMの教室では定期テストを実施していない場合が多く、成績も義務づけられていない限りつけていない場合が多い、ということである。その理由は、3つ考えられる。第一に、GDMでは授業のプロセスが勝負どころであるということである。このことは、どの教授法を使うにしても大切なことであるが、特にGDMでは授業中の有形無形の評価活動（小テストや発言のチェックなど）を通して、その時点ごとに教えたポイントが定着しているかどうかを確認することが重要である。それゆえに総括的なテストを実施したり、成績をつけることは、GDMの教室ではそれほど重要な意味を持っていない。第二に、GDMの教室は塾や英会話学校が大半で、小人数のクラスが多く、教師はあらためて総括的なテストをしなくとも個々の生徒の実力を把握しやすい。第三に、二点目と関連するが、GDMの授業は教師と生徒の“interaction”が豊富であるということである。このことも授業中の生徒理解を容易にし、定期テストの必要性を少なくしている。また生徒の側からすると、授業で常に教師からフィードバックを受けて、どれだけ学習事項が身についているか確認できる機会が多いということになり、期末にまとめて成績をつけてもらう必要性はあまりなくなる。

1-c. 評価についての問題点

— アンケートから —

今回のアンケート調査ではまた、評価についての悩みや問題点なども書いて頂いた。意見をまとめてみると大体以下の3点になる。

1) 生徒のいろいろな面をどうとらえるか

和田裕子氏（大阪）は、「何を基準として評価すればよいか？ 発言はできてもWritingに弱い生徒がいれば、発言には消極的だがWritingに強い生徒もいる。また、Writingでも穴埋めの問題はできなくても、絵を書かせ

れば、非常におもしろい発想を見せる生徒もいる。……………」と述べ、この他にも竹内庸子氏（清瀬市）、昆布孝子氏（奈良）、桜田敬子氏（千葉）が同様の問題を指摘している。

「個人」のどこをとらえて評価すべきか、総合的にどうとらえるのかというこの問題は、簡単には答えが出せない。しかし基本的には、すでに述べた通り、教師が心のなかに複数のモノサシを用意しておくことであろう。生徒それぞれを違ったモノサシで見ることが大切だと思われる（これも難しいことだが）。しかしこのことは生徒全員に共通するモノサシを使っただけではいけないことではない。やはり教師としては、どの生徒にも適用するモノサシを何本かを持っているはずであり、持つべきである。そうしたモノサシは教師によって少しずつ異なっていて構わない。それがどのようなモノサシであるかについてのヒントは、「GDMでめざす学力とは」の項で述べた。

個人差を考えるときにもうひとつ大切な点は、片桐ヨウコ氏（京都）が指摘している。「長年おしえていて一番恐れていることは、ひとりの生徒を固定した見方で見てしまうのではないか、ということです。その子のいいところを見逃しているんじゃないか、ということです。」

2) 受験用学力との衝突

丹羽美津子氏（金沢）は、「GDMをやっていてよかったこともたくさんあるけれども、今はそれよりも危機意識の方が強い。それは受験態勢が増々強化されて、小学生といえども5教科以外の科目を学ぼうという余裕のある生徒が少なく、教える場を持つことが困難になってきた。目的意識を持って英語を学ぼうという小学生をどのようにしたらえられるのか、苦慮している。」と述べている。たしかにこうした厳しい現状はあり、真剣に考える必要がある。しかし必ずしも悲観的になることはないと思われる。今年2月の月例会（西日本支部）でもこの点が話題にのぼり、

「見かたをかえてみると、GDMは受験勉強では決してつけられない英語力をつけさせられるという点で、このような時代にむしろ貴重な存在である」という意見が出された。また、GDMでつけた力を伸ばしていけば、充分受験用の学力もつくという意見もある。

3) 公立・私立学校での評価の悩み

公立・私立学校でGDMを実践する際に直面する評価の問題も多くの人が指摘している。大きく分けて三つの問題がある。どれも簡単に解決することは難しく、公立・私立学校でGDMを実践する際の大きな障害になっている。

第一は、義務づけられているテストがペーパーテストが主体で、GDMで養った力がうまくテストに反映されないことである。飯田恵子氏（静岡）は、中一にGDM的導入を試みた友人が「五月半ばの中間テストで挫折」という例を引き、「例えば、絵を見せて作文させるのは、皆書けたようですが、日本語を英作文させるという問題はサンタンたる結果」であったと述べている。また成井幸子氏（町田市）は、授業中の子供の積極的な態度や楽しい発想などはペーパーテストの結果にはなかなか現れてこないとし、「複数や文法的ミスの為に授業を大変enjoyしている子に思うような結果を与えられないことが多く、教師自身矛盾を感じつつある現状」であると述べている。

第二は、成績をつけなければならないという問題である。吉沢郁生氏（横浜）は、「GDMで教えた結果は、生徒一人一人にそれぞれの個性と共に現れるのですが、それを5段階の数字に換算しなければならない、ということが不愉快です。」と述べ、山田初裕氏（東京）は、同様に数字による評価に対する疑問をなげかけている。

第三は、第一点目と関係するが、違う教授法でおしえる同僚とのかねあいである。根古谷常雄氏（千葉）は、「教えたことについて評価するという考え方で行くべきなのですが、

英語教師が一つの学校に何人かいて、別の指導法で教えている場合、中間や期末テストの時に困ることが起きると思います。その場合、了解を得て、それぞれの教師が別の問題でやる以外にないように思います」と述べている。

2. GDMの授業で評価することの意味

「本来、評価というのは、教師が自分の教え方でよかったのかどうか、生徒にしっかりと教えたことが定着しているかどうかを知るために行うものです。生徒を評価することによって、教師の方がその授業の吟味をうながされる、そういうものであるべきです。」

（吉沢郁生氏のアンケートより）。評価が持つ意味は、この言葉に集約される。この言葉からいえることは、ひとつに評価の対象には生徒だけではなく教師自身も含まれるということである。特に教師自身も生徒を評価することから反省材料を得るべきであるという点は、あたりまえのことだが、ついつい忘れがちである。生徒を責める前にまず自分を顧みなければならない。もうひとつ付け加えておきたいことは、教え方が良かったどうか、そして定着しているかどうかを知るための方法は、必ずしもテストだけではないし、つねに点数化する必要もないということである。定期テストや小テストはもちろん、授業中の生徒の発言チェック、問題練習、宿題なども評価の方法である。

さらにGDMでの評価を考える時にとても大切なことは、決して生徒たちをランクづけることが目的でないということである。「テスト」と聞いて生徒たちがビクッとするのは、その言葉の裏にいつも「序列化」「競争」ということがつきまといっているからである。もちろん何かひとつのモノサシで生徒全員を一律に並べることはできる。しかしそれはGDMの教室には、最も似つかわしくない評価の方法である。生徒それぞれに教えたことが身についているかを確かめることが大切である。さらに教師はどの生徒の評価にも使

うモノサシをふつう何本か持っているが、GDMで教えるときにさらに重要なのは、生徒ごとに違ったモノサシを持つことである。

3. GDMでめざす学力とは

月例会でのディスカッションや現在までに話すことのできた教師の意見をまとめてみると、GDMの授業を通して生徒は次にあげる3つの側面を伸ばすことができる。(注3)

1) 自発的な態度

2) 多角的にものをみる習慣

3) 言葉とイメージを結合する習慣

1) は、自分からすすんで表現しようとする態度であり、GDMの授業では特に大切にされている点である。こうした態度を学力の一部と考えて良いかどうかについては異論があろうが、少なくとも外国語を使えるかどうか以前の問題として、非常に重要なことであることは確かである。GDMの授業では、引き出したい文が生徒の口から自然に出てくるような場面を設定し、教師は生徒がその場面についてどのようなことを言っても受けとめることが基本となっている。生徒の発言が文法的に正確である限り、教師は生徒の自発性を重んじる。(注4)

2) は、ものごとをいろいろな角度や視点からみることができるとい側面である。このことも、上で述べたように、ある場面についての多様な発言を認めるという教師の姿勢があるからである。GDMの授業では、ひとつの場面を設定すると、生徒達はそれについて文を盛んに作る。生徒達は、できるだけたくさん文を自分で工夫して作る習慣がつくだけでなく、他の生徒の文を聞いて、自分とは違ったものの見方に触れることもできる。ものごとを多角的に視るという力は、語彙力が足りない初級者が外国語を話したり、書いたりするときに、大変役にたつ力であると思われる。GDMで習った生徒は、難しい単語を知らなくても、なんとか知っている単語で目に見えること、具体的なことから言い表して、結局言いたいことを伝えるという力を身

につけることができる。

3) は、イメージと結びつけて言葉を使うという習慣である。外国語を学ぶときに急に抽象度の高い概念を言い表すのは難しい。初級の段階では、できるだけ目に見える、言葉にしやすいことから始める必要がある。イメージ化できる題材から始めることは、抽象的な題材について言葉を使う、より高度なレベルへの大切なステップである。GDMで学んだ生徒が英語をイメージと密接に結びつけて習得しているということは、前田(1983)の実験が裏付けている(注5)。この実験では、いくつかのグループに英単語をフラッシュカードで提示し、それに対してa) 日本語、b) イメージ、c) 別の英単語のうち、どれが最初に頭に浮んだかを調べた。その結果、文法訳読式の教授法で学んだ中・高校生は、a) を思い浮かべる者が多かったのに対して、GDMで学んでいる小・中学生は、b) を思い浮かべる者がかなり多かった。この実験結果は、明らかにGDMの生徒が、イメージと結びつけて言葉を使う習慣を身につけていることを示している。これはGDMの授業において生徒達が、具体的なsituationのなかで英語を使うことを通して、イメージから言葉へ、言葉からイメージへという練習を重ねるからである。

これら3つの学力は、さらに実験的検証を重ねる必要があろうが、GDMで習ううちに生徒達が少しずつ身につけるものであると、多くの教師が経験的に知っていることである。それらは、GDMで習った生徒が習得できる大切な学力であり、また違った言い方をすれば、GDMで少なくとも身につけさせるよう努力すべき学力ではないかと思われる。それゆえにGDMで教える際にも、そしてその結果を評価、テストをする際にも、できるだけこれらの学力を意識するべきではなかろうか。

4. GDMに適しているテストとは

評価するためには、上で述べたようにテス

トだけでなくいろいろな方法を使うことが必要である。しかし場合によっては、テストを使う方が良いことがある：a) 生徒が多すぎたり、教師の経験が浅いなどのために、生徒の実態がつかみきれない場合、b) テストを通じて、授業では出てこない生徒のいろいろな面をみたい場合、c) 学校の制度のために定期テストなどをしなくてはならない場合、d) 考えたことがどれだけ身についたか学期末などに総括的に確かめて、カリキュラムや教授法の改善に役立てたい場合（例：金沢K YEC）。

さて、このような場合、GDMで教えた結果をはかるには、どのようなテストを使ったら良いであろうか。絶対的なルールは示せないが、基本的には以下の4点であろう。

1) 意味・Situationがかかわるテスト

なるべく絵または言葉でSituationが限定されているテストを使うほうが良い。意味が分からなくても答えられる問題はさけるべきである。たとえば穴埋め問題のなかでも、

*That _____ a book.

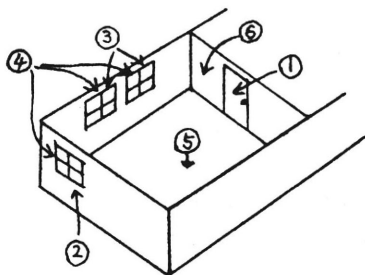
(ア is イ are ウ am エ do
オ have)

*My sister is _____ English now.

(ア study イ studies ウ studying
エ studied)

などのように、意味をあまり考えなくても答えられる問題は、GDMで教えた結果のためすには適していない。

絵を使ってsituationを限定したテストの例をあげる。

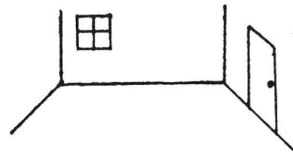


*上の絵を見て、()に必要ならば、a またはtheを入れなさい。単語を入れる必要のない所には×を入れなさい。

1. This is () door of the room.
2. This is () window of the room.
3. These are () windows of the room.
4. These are () windows of the room.
5. This is () floor of the room.
6. This is () wall of the room.

(吉沢郁生氏 高1、1学期テスト)

つぎの例は、下の文を読んで絵を描かせて理解をみる問題である。



There is a boy at the window.

There is a girl at the door.

There are a table and a seat on the floor.

There are two glasses and a bottle on the table.

There is a man's hat on the seat.

There is a clock on the wall.

The time is five now.

(大阪YMCA Workbook IIより)

2) 和訳・英訳問題は使わないようにする

GDMの授業では、日本語の介入は極力さける。翻訳作業は、英語が「使える」こととはかなり異質であることを認識すべきである。

3) 生徒の独創性がでるテスト

英語の知識をためすテストだけでなく、生徒の自由な発想で答えが書けるテストも使う

べきであろう。こうしたテストは採点基準が難しいので、客観的な評価資料には利用しにくい。しかしふだんの授業で自由にものを視ること、そして自発性を大切にしているわけであるから、テストにもそれらを反映すべきではなかろうか。たとえば、習った文を使って空所に絵と説明文を書かせる問題や絵を見せてストーリーを書かせる問題などである。

つぎの例は、“refrigerator”という英単語をあえて英作文させる問題における生徒の答案例である。(間違いは改めずにおいた)
*Refrigerators keep foods cold. So you can keep your left-over or raw foods. But it isn't used only to keep foods. Someone keep his secret things like money, tests and ???

(大塩直也氏 中3、1学期中間テスト)

4) 問題指示に文法用語はつかわない

文法用語を使ったテストは、GDM的ではない。たとえば“There are books on the desk.”を疑問文に直せ、といった文法用語を使った問題は適していない。

ほかにもいくつかルールはあると思うが、大切なことは授業での教えかた、教えた内容とかけはなれたことをテストのなかで要求しないことである。GDMの教室で使うテストを作成する際には、吉沢美穂『絵を使った文型練習』大修館、吉沢美穂 G・D・M. A Workbook for Adults 横浜アカデミー語学研修センターなどが役にたつ。また金沢 KYEC GDM英語教授法 評価研究会の『評価研究』(パンフレット)には、4技能それぞれに豊富なテスト例が挙げてあり、非常に参考になる。

5. GDMで不十分になりがちだった面

ここでGDMではあまり評価の対象にはされていない(あるいは授業であまり重視されていない)側面についてコメントしたい。そうした側面を指摘することによって、これらのGDMを高めてゆくためのヒントを示し

たい。

1)スピーキングについて

スピーキングのテスト自体があまり行なわれていないが、そのなかでも発音の面をテストすることはあまりないようである。とくにスピードとリズムは、授業のなかでも重視している教師は多いとは言えない(もちろん経験あるGDMの教師はこの点を重視している教師が多い)。教師も生徒も授業の最初から最後まで全く同じスピードで発言することは、あまり望ましいことではない。定着が進むにつれスピードを上げリズムも自然なものに近づけてゆく必要がある。GDMで教える教師、特に経験の浅い教師は、個々の単語の意味を重視するあまり、話すときに単語をひとつひとつしっかりと発音してしまう傾向があるように思う。スピードとリズムは、授業でも評価でも大切にしなければならないポイントのひとつである。

2)リスニングについて

GDMで習った生徒がリスニングで困る点は、ひとつに語彙であり、もうひとつはスピードや音のつながりなどの自然な英語の音声的な特徴であると思われる。前者は多くの学習者が入門期であることを考えると仕方ないことであろう。ここでは後者について述べる。生徒が授業のなかで聞く英語は、教師と他の生徒の英語、もしくはテープの英語である。問題なのは、GDMの授業で生徒が最も多く聞く英語が、他の生徒の英語であるということである。つまり授業のなかで生徒の耳に入る英語に音声的に不自然なものが多いことになる。さらには教室が最もネイティブスピーカーに近い存在である教師が話す機会が豊富にあるわけではない。GDMでは生徒の自発的な発言が他の教授法に比べて非常に多いが、裏返すと他の生徒の英語をそれだけ多くインプットしてしまうということになる。これは入門期の教授法としてGDMがもつ長所が裏目に出ることがあるということである。しかしこの問題は、授業を改善することによって

かなり克服できると思われる。教師は自分の英語を磨き、生徒の発言をできるだけ自然の英語に近づける努力をし、テストの際にもなるべく自然な英語を使った問題を用いるべきであろう。

3) ライティングについて

GDMの生徒は発表技能についてはかなりの力をつけることができる。ライティングについてもそのことがあてはまる。あることがらをかみ砕いて書くことができる。しかし一般に顧みられていない点は、ものごとを順序だてて書くということである。この点は、特にライティングにおいて重要である。GDMの授業で使われるライティングのテストには、一枚の絵を示しそれについて英文を書く問題は多いが、その英文を順序だてて書くように指示している問題は少ない。ものごとを順序だてて書くという力は、特に上級に進むにしたがって必要になってくる。授業においてもテストにおいても、この点に生徒の注意を向けさせることが大切である。

4) リーディングについて

リーディングのテスト（GDMのテスト全般についても言えることだが）の多くは、絵を使ったものが多い。たとえば絵についての英問を読んで答える問題などである。GDMでは絵を多用するが、これは初級者にとっては学習の大きな助けになる。しかし現実のリーディングという活動には、必ずしも絵がともなっているわけではない。上級に進むにしたがって学習者は、絵を介さないで英文を理解することに慣れなければならない。文字だけを見て内容を理解する練習やテスト問題も使う必要がある。

GDMは入門期の学習者を教えるにはかなり効果的である。この点は誰もが認めるところであろう。しかしそうではあっても英語のすべての面を効果的に教えられるわけではない。上級になるにしたがって、この教授法ではカバーできない面も出てくる。GDMも多

くの教授法のひとつであり、「教えやすい面」と「教えにくい面」がある。これからのGDMを考えるにあたって、この2面をはっきりと認識する必要がある。「教えやすい面」については、GDMの長所として明確に主張することができるし、「教えにくい面」については、授業や評価でできるだけ補うよう工夫してゆくべきであろう。

おわりに

本稿ではGDMで教える教師が、どのような考えかたで、そしてどのような方法で評価を行っているか、実状を明らかにし、評価に関していろいろな悩みや問題点があることを指摘した。そしてGDMでめざす学力とはどのようなものであるか、それをどう評価したらよいかについて述べた。より多くのテスト例、資料、意見を紹介したかったが、紙面の都合上やむなく割愛せざるを得なかった。また成績とその通知の諸問題、自己評価の意義、個人差の問題、授業過程における評価のあり方などについても十分に述べることができなかった。今後の課題としたい。

本稿の意図は、決してGDMの評価についての考えかたを規格化したり統一したりすることではない。ここで述べてきたことが、日々の授業を高めていくための、そしてGDMを高めてゆくためのヒントとなれば幸いである。

なお本稿をまとめるにあたって、丹羽美津子さん、近藤妙子さん、前田ひかりさん、片桐ユズル・ヨウコさんをはじめ、大変多くの方々に御世話になった。またアンケートに協力していただいた方々にも感謝の意を表したい。

注釈

1 広島YMCA英語学院小中学生科における評価についての近藤氏からの私信より。

2 自己評価については、高槻高校の大塩直也氏の「健康診断」が参考になる。これは答案返却時に生徒に記入させる自己診断表であ

る。

3 この3つの側面は、形を変えていろいろな所で耳にするが、特に2月の西日本支部月例会（神戸）での、評価に関するディスカッションで話題にのぼった。

4 GDMの授業の難しさのひとつは、生徒の自発性と文法的なバランスをとることである。このバランスを保つには、教師が引き出したい文が自然に出てくるような、かつ生徒が口を開きたくなるようなsituationをつくるが必要になってくる。また正確さを高めるために、どうしても生徒の誤りがある程度直す必要が出てくる。その際に自発性をそが

ずに、かつ効果的に訂正する方法を考えるべきであろう。（萬谷1983を参照、小篠編『英語の誤答分析』大修館、pp.154-77）。

5 前田ひかり The Semantic Acquisition of a Second Language 国際キリスト教大学、卒業論文、1983。この研究ではまた、英単語を提示して、それについてどのような語を連想したかについても実験を行って、GDMの生徒と他の生徒を比較しており、興味深い。また千葉YMCAの岩宮節子氏は、本文で紹介した実験と類似のテストを行い、やはり同様の結果を得た。

活 動 報 告 （1982年9月～1983年8月）

GDM英語教授法セミナー（東西支部合同）

3月27日（日）～30（水） 大阪YMCA六甲研修センター 受講者53名

8月20日（土）～23日（火） 御殿場YMCA 東山荘 受講者88名

公開講演会

《東日本支部》

6月11日（土） 労働会館 参加者161名
「Graded Direct Methodの授業について（心とコトバの触れ合いを目指して）」

東山永、「The Very First Lesson in GDM」山田初裕。Teaching：3つのtense 唐木田照代、関係代名詞

“what” 吉沢郁生、Narration 小川和子

《西日本支部》

6月18日（土） 神戸市勤労会館 106名
「言語意識を高めるには」片桐ユズル、
「GDMによる第1時間目の授業」中郷安浩。Teaching：make 昆布孝子、if 迫田久美子、if（仮定法）小高一夫

月例研究会

《東日本支部》

9月18日（土） 千代田区民センター 63名
（4:00～6:00）（総会 Teaching：this, that, my, your, his, her 藤村理彦、

Book Review：室勝・小高一夫著「英語を書く本」山田初裕、
升川潔著「使える英文法へ」箕田兵衛、「パーシク先生の誰も教えなかった英語術」吉沢郁生）

10月23日（土） 東京YWCA 43名（which？
（3:00～5:00） 井村晴子、be going to～佐藤由美子、see（EPI P41）新井等）

11月28日（日） 東京女子大学同窓会館 71名
（2:40～5:00）（chief, knowledge, etc.（EPII P115）升川潔、taste（EPII P121-123）東山永、EPII P134小川和子、吉沢美穂先生追悼会）

12月18日（土） 婦選会館 42名（before, after
（3:00～5:00）（prep.）竹内庸子、before, after（conj.）古川紀江、「学校現場からの報告」箕田兵衛、安西聖雄）

1月22日（土） 東京YWCA 51名（which
（3:00～5:00）（rel.）金原勝男、was 岡田季美子、「失語症者への試み」公立昭和病院言語治療士 今西恵

津子)

2月27日(日) 全電通労働会館 62名 (升川先生追悼会)

3月19日(土) 横浜アカデミー 32名 (have 柳沢康司、say 神保綾子、「学校現場でのGDM実践」降旗富子)

4月16日(土) 東京YWCA 58名 (of 岩渕千津子、who (rel.) 岩宮節子、「コンピューターと文脈」室謙二)

5月28日(土) 千葉YMCA 42名 another 国松ひさ子、Book Review: 「田中克彦著「チョムスキー」について」山田初裕)

7月9日(土) 東京女子大学同窓会館 50名 taking 松本泰子、「Basic とGDM」室勝)

《西日本支部》

9月26日(日) 緑地理数教室 18名 (総会、make an attempt 川上伊都子、「Cone of Experience-Direct でやるわけ」小高一夫)

10月31日(日) 神戸市勤労会館 16名 (keep 福本洋、EPI P93-95 メイヤーさよ子、「Values Clarification 価値観分析」倉戸ヨシヤ)

11月23日(火) 奈良YMCA西大寺校 15名 (make 下川一子、EPI P97-99松川和子、「Paragraph Writing-理論と練習」伊達民

和

12月19日(日) 緑地理数教室 21名 (who (rel.) 大塩直也、seem 昆布孝子、「BASIC English に用いられている感情表現」村上光久)

1月30日(日) 京都宇多野ユースホステル 29名 (seem 小川和子、if (Subjunctive) 小高一夫、「Teaching as a Flow Experience」片桐ユズル)

2月27日(日) 日本イタリア京都会館 18名 (keep 皆川春雄、EPI P58-62 釘宮愛子、「自由英作文について」矢ヶ崎庄司)

3月26日(土) 神戸市勤労会館 34名 (升川先生追悼講演会 講演: 片桐ユズル)

4月24日(日) 緑地理数教室 29名 (take 日高智、Yes-No question 平井紘子、make 昆布孝子、「中学の現場から」小林範子、浜坂幸子)

5月22日(日) 日本イタリア京都会館 26名 (go 高橋修子、who (rel.) 岡谷よし子、Irish Thru Pictures 中郷安浩、「時事英語のすすめ」村上光久)

7月16日(土) 神戸市勤労会館 21名 (of 萬谷隆一、before, after (conj.) 吉野哲子、「GDMの基本論理」小高一夫)

☆ 編集後記 ☆

「評価が人をつくる」といいます。人は自らの行為が他者にひきおこす反応をみて、次の行き方(生き方)を決めているということでしょう。そういう意味では、対人関係の中での言葉や仕草はすべて評価行為であり、他人を育てもすれば崩しもするといえないことありません。ところが評価といえば、試験や成績といった「取りたて評価」のみに注目するのが当たり前になっています。

GDMは広い意味の、一瞬一瞬の評価をほんとうに大切にしようとしていると思います。それに付随して「GDMはテスト嫌い」という「評価」もあるようなのですが、その真偽のほどは如何?……この評価特集号がきっかけとなって、人を育てる評価の理論と実践が少しでも深まれば幸いです。

今回は非常に多くの方々のお世話になりました。執筆者はもちろん、評価に関する調査および別添の教室調査にご協力下さいました皆さまに厚くお礼申しあげます。(大塩)